布形似袈裟、年可廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不通、不知何國人、大唐人等見之僉曰、崑崙人、後頗習中國語、自謂天竺人、常彈一弦琴、歌聲哀楚、閱其資物、有如草實者、謂之綿種、依其願、令住川原寺、即賣隨身物、立屋西墉外路邊、令窮人休息焉、後遷住近江國國分寺、

〔類聚國史百九十九殊俗〕延暦十九年四月庚辰、以流來崑崙人所賣綿種、賜紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、及太宰府等諸國殖之、

〔木綿通考〕吾皇朝にいにしへ棉有しを聞ず、唯萬葉集卷三に、しらぬ火の筑紫のわたは身につけていまだはきねどあたゝかにみゆ、とあるを物にみえたる初とす、これ舶來の物なるべし、續日本紀に、神護景雲三年三月、始勅太宰府、歲貢棉、とあるも、唐山より齎わたせる棉を貢りし也、其後類聚國史に、延暦十三年七月、有蠻舶漂流至參河、其人以布覆背、〇中略とあるぞ、其種を傳へ來れる始なりける、然れども中頃の世に絶はてたりと覺しくて、夫木集に新撰六帖にも見ゆ衣笠內大臣の歌、衣笠內府は定家卿の門人にましまして、鎌倉實朝卿と同時にて同門なり、敷島のやまとにはあらぬから人のうゑてし綿の種は絶にき、ともよみ玉へり、即延暦の世に植たりし種をさし玉へるなり、野語述說には、永祿天正の頃、始て棉種西域より渡り來て、今に百年餘になりぬ、祖母嘗て語られしは、わが十五六歲の時、美濃の岐阜にて木綿といふ物を始て著たりき、當時は人々綺綾の如くに珍重したりしを、それより在在所々に多く植て、一般にひろまりたりと也、されどもいまだ紡織の法を悉さで、今日の精緻には及ばずとみえたり、これ延暦より後ふたゝび棉種の傳來せるなり、但しこたびのは木綿には非ず、草綿にて、今の世に天下なべて物する綿すなはち是なり、

敏成〇吉田按ずるに、貝原好古の和事始、及續和漢名數、伊藤長胤の秉燭談などには、文祿の頃渡り來れるよしみえたれば、秉燭談には、南蠻人來貢すと有、永祿は文祿の訛にも有べし、又右の書どもに、此をも木綿の事としたるはわろし、即今の世まで連綿して、歲々に繁り行める草綿なり、さるを木